

第二十三章 海獣パンダ

貨物船の周りが慌ただしくなる。プチレンコン大統領はブラックシー艦隊に総動員令を出す。巡洋艦、駆逐艦など合わせて三十隻ほどが集結しつつある。

「バカだな。重大事件が発生したとデモンストレーションしているようなものだ」

榊が鼻で笑う。加藤も追従する。

「オスウーマントルコの小型戦闘艦を撃沈しただけでもド派手な行動だ。注目を集めてどうしようというのだ」

「あの貨物船のトウモロコシを救う方法はあるの？」

イリが貨物船の周りの海面が騒がしくなっているのに気づく。

「イルカ？」

加藤が確認する。確かに数十頭のイルカの群れが海面をジャンプしながら戯れている。その中にイルカらしくない、背びれがひときわ大きいものが泳いでいる。

「巨大なサメか？」

「違う。色が……」

イリが加藤の言葉を遮る。

「パンダだわ。えーつと……」

砂漠で育ったイリには名前が出てこない。

「シャチだ！」

さすが海の男。榊が断定する。白と黒のツートンカラーのシャチをパンダと思うのも無理はない。

「可愛い！」

「シャチはどう猛です。サメでさえシャチを避けます」

*

隊列を組んだブラックシー艦隊が貨物船に向かう。巡洋艦から照明弾が発射される。貨物船の反対側には面子を潰されたオスウーマントルコ海軍の駆逐艦が近づいてくる。

宇宙戦艦の艦橋の大型立体浮遊スクリーンにそれらの状況が映し出されているが、切り離された海面がクローズアップされる。

「シャチの背びれ！ 大きすぎるぞ」

榊には背びれが波を切る状況からシャチの大きさを推測する。さすが潜水艦を操船すれば天才と言う異名を持つだけはある。しかし、先ほど発見したシャチとはスケールが違いすぎる。

榊は駆逐艦どころか巡洋艦ぐらいの大きさがあると断定した。

すでに浮遊立体透過スクリーンにはこのシャチの大きさが示されている。イリと加藤は榊の

異常までの興奮に言葉を出せない。

「大きさはじゃない。背びれが薄すぎる。まるでカミソリだ！」

櫂の叫び声と海面を進行する背びれがロシア軍駆逐艦に突進する。櫂の言うとおりで、まるで豆腐を包丁で切るように船体が斜めに二分される。艦首側は進行方向の左側にずれる。艦尾側はそのまま前方に進もうとする。浸水で艦首が浮き上がる。艦尾側はエンジンの重みで前進しながら沈み込む。水兵は我先に飛び込む。沈没すれば巻き込まれて溺れてしまう。

「巨大なシャチが巡洋艦に向かっていてる！」

宇宙空間からでも宇宙戦艦の高解像カメラはまるで海面すれすれで撮影しているかのように鮮明な映像を浮遊透過スクリーンに流す。

巡洋艦からは巨大な背びれしか見えない。海面を切るように向かってくるので白波がまったく立たない。波を切る音もしない。駆逐艦の最期を見せつけられたせいか水兵は持ち場を放棄して次々と海に飛び込む。

正面から突っ込む巨大シャチが背びれで巡洋艦を左右に分割する。ブラックシー艦隊になすべがない。泳ぐ水兵を助ける余裕もない。後退しようにも巨大シャチから逃れられるほどの速度は出せないし操舵士もあつげにとられる艦長を見つめるだけで舵が持ったままだ。全身をしなやかに躍動させて近づいてくる巨大シャチから逃げることは至難の業だ。

*

結局ブラックシー艦隊は全滅した。イリ、榊、加藤は目を閉じる。それほど巨大シャチの攻撃はすさまじいものだった。一方、ウクライナー共和国からの穀物輸送は順調に進み食糧難で待ち焦がれていた貧しい国々の人々を救済できた。

それはさておき三人は改めてブラックシーをくまなく見つめる。どこにもあのシャチはいない。忽然と姿を消した。

「宇宙戦艦から見ていると可愛いパンダなのに」

「可愛いと言うがパンダは熊の仲間だぞ」

「でも戦車でも怖いゾウやトラや猛牛だったけれど、ダンボや子猫……だと思えば可愛いわ」
ここで加藤が重大発言をする。

「可愛いという問題ではない。このような動物まがいの武器を登場させた作者の強烈なメッセージでは？」

「ノロではなくウイルス族に間違いない。もう一度新疆ウイルス自治領に行ってみるか」